

A-182 ベビーフード(りんご)に関する品質の比較(オ1報)

東北女子短期大学 の 柿崎興一

目的 ベビーフードの市販品が購入可能になったのは昭和35年以後である。昭和51年の生産指数は800と著しく増加している。新しい製造方法、容器の改良も進み、品質的には初期の製品とは比較できない。

近年、若い共働きの母親の間にもベビーフードの利用が目立つが、市場には多くの新製品、輸入品が氾濫を呈する傾向にある。一番問題になるのがニエルフ・ライフの期間であるが、一般的には2-4年間は安全であると唱えている。しかし、農産加工品の多くはJAS規格というチェック機関があり製品の安全を検討している。

演者は大きな問題点として消費者が安心して使えるベビーフードであるためにも、ニエルの品質を比較検討したので報告する。

方法 短大生を対象にベビーフードの意識調査を行なって、問題点を明らかにした。市販されているベビーフードの中からりんご製品(ペーストタイプ・ジュースタイプ・ドライタイプ)を用いて理化学的検討を試みた。主にビン・缶詰に対しては缶詰の検査法と検鏡による組織の比較・褐変度・有機酸・糖質の組成・ビタミンCの含有量等は常法通り行なった。

結果 ベビーフードは種類が多すぎる。製造日目の記号もバラバラで判断に迷う。ビン缶詰タイプは真空度が20-50 cmHgと一定していない。糖酸比も30-85%と味に付いても大きなバラッキがある。粘性についても一定していない。検鏡でもパルプ 果皮、うらぎレにバラッキが見られ、原料については未熟果を使用していると思われるものもあった。